

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年  
**9月号**  
通巻553号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年9月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



平成26年12月17日寒風の中、春日若宮おん祭お渡り式の行列で、馬上の矢追盛賢さん(奈良商工会議所副会頭として)

**再録** 昭和41(1966)年9月23日発行『すさのお』第9号より

## 瑞光庵解体の日 ～紫陽花邑のシンボル～

法主 矢追日聖 (満54歳)

**法主寸言**  
私は「霊界人と共に生活し、先祖に順応する」とよくいいますが、あなたはこれをどのよう<sup>に</sup>に、心にうけとめているでしょうか。  
もう一度、考えてみてください。

必要とするものは、必要とする時がくれば、必要に応じた形が出来てくるものです。その反面、そのものが不要でなくなった時は、その形は無くなってゆくのです。人の心というものは、出てくる時は喜び、無くなってゆく時は悲しみです。これは美しい人情の表現と見えます。

昭和二十四年の夏、大倭大本宮の要の位置に、吹けば飛ぶような庵が建ちました。松の丸太で掘立柱、四坪、杉皮葺き、入口は蝶番でつけたバツタラ戸、これが私の住居であり大倭の大黒柱でもあったわけですが。床の上に畳があり、天井はないが、壁がついている。しかもそれは片壁だけ、二方の窓は釘付けの硝子障子、これでも焼けた住居にくらぶれば御殿のようであったのです。

人間の喜びというものは、どんな所にも転がっているものと、つくづく思いました。ランブの山小屋で原始生活ながらの暮らしでしたが、生まれて初めて知った一間の暮らしの便利さ、書齋兼応接間、茶の間兼台所、寝室兼居間という風に、なまくら者にはもってこいです。

## 風流小屋

窓から入る月の光や、寝ながらにして眺める星空、墨絵のように浮かぶ松の梢、屋外にいるような感じ。その代わり吹雪の夜などは顔の上に雪花が落ちてきます。隙間だらけの小屋ですからね。朝日が山際に出てくるともう眠るわけにはゆきません。顔の上にカンカンと照りつけてくれます。

夏の夕立は殊のほか忙しい。乾物のように巻き上がる杉皮に、急に多量な雨がかるので、部屋中あちこち移動性の雨漏りが始まる。鍋、皿、茶碗、あるだけの容器を受けて走り廻る。そのリズムに乗った各種各様の音にも何とも言えない楽しみがあります。これはよいのですが、蚊帳を吊っていないのに眠っている時に襲ってくる深夜の夕立にはまいってしまいます。昭和三十六年頃だったと思いますが、雨漏りがあまりにもひどくなっ



瑞光庵(手前)・瑞光院(奥)

きたので、一日あけて、杉皮の上へ藁で薄く葺いたのです。葺き終わってから棟に腰をおろし、これで大丈夫、枕を高くして眠れると喜んでみました。雨が降っても漏りがない。何か忘れ物をしたような物足りない感じがしますが、一年はこと

なく過ごしたのですが、どうしたことか部屋のあちこちに色々な虫が落ちてくるようになりました。その原因を調べてみると、藁と杉皮の接触する所は、適当な温度を保つよう出来ていたので、屋根に登って藁を上げると、居るわ居るわ、大小取り混ぜた無数の虫の新天地が出来ていました。これには兜をぬいで、早速、取りのけて、杉皮を張りつけた。思い出の多い掘立小屋でした。

### 保存要望の声を聞きつつ

大倭の歴史を知るのにも、また多くの人々の懐かしい思いを秘めた建物でもあるから、何とかして保存してほしいという声もかなりあったのですが、とうとう昭和四十一年九月十八日の正午頃、その姿は永久に地上から消え去った。それは大倭の若者の手によって静かに秩序を追って解体していったのです。

朝七時、教長家麻呂が連絡にきた。下りてゆくと既に畳は持ち出され床板をはがしていた。一本の柱、一枚の板、そうしたものからにじみでる当初の経済事情がヒシヒシと浮かんでくる。刻一刻、若者のたくましい腕は家の形を容赦なく変えてゆく。

### 労苦をねぎらいつつ

あそこをもう少しわたつてとか、油で磨いたような入口の柱、あれもこれもと思出しもって見守る間も与えられずに手際よく整理されてゆくのです。消え去る瞬間の、楽しいのやら淋しいのやら感慨無量というのはこうした気持ちを言うのでしょうか。

淋しかったのはたしかです。山の中を駆け廻り手頃な太さで真直な若松を探して、一本一本に何

かの思いをこめ打ちつけてあるタル木、毎朝毎晩必ずこのタル木を眺めて暮らしてきたものであるだけに、無気にはずして次々と下へ投げている所作を眺めた時には、ほろりとさせられました。側に走り寄って満十七年の労苦をねぎらい、美しくその汚れを洗い拭きたい気持ちで一杯でした。製材所に捨ててあるようなコバを板にひき、屋根の下地に張った時のヤリクリ世帯はもう再びやっつてはこない。わびしいことです。組み立てられているこの庵のすべてのものが、十七年の風雪を誰にでも話しかけてきたのですが、その話しを聞き取れる人が大倭に何人あったでしょうか。

### 面影をどどめて

現在(瑞光院)の私の寝室にあてている部屋は、天井はなく、タル木の上に杉皮を張り、旧庵の面影をどどめているのです。

家には生命があり、その気の働きもあります。その家と、其処に住む人との気の流れもあるのです。家に対しては、生きている人に対するような思いやりの心があってよいと思うのです。

十七年の歳月は、子供達を成長させました。それは今の時代に生きる若者としてであります。彼等は何の惜しげもなく、樂しげに短時間で解体し整理し終わつたのです。ここに大倭の新しいエネルギーを見ることが出来ます。「こぼつ(毀)みたいな言葉を使うな」とどなっていた今井(富蔵)苑長の声や、駄々々と庵の中を掃除している(青山)日元の姿は特に印象的で、新旧明暗の一齣でした。過去に囚われず、来るべき大倭の重責を背負って立つ若人の明かるい笑顔を眺めては、何か知らぬ温かいものが湧いてくる思いでした。

(昭和四十一年九月二十一日、日記記)

# 矢追盛賢さん追悼特集

大倭一門入門順  
大倭殖産入社順

## 胸がいっぱいになる

教長 矢追家麻呂

去る七月十五日、大倭神宮の月次祭で参拝していると、目の前にこちらをじっと見つめている盛賢の顔がパツと浮かんで来た。今でも盛賢のことを想うと、さまざまな思い出が蘇ってきて胸がいっぱいになる。

彼の子供時代には、自分とは大分年が離れていたのに一緒に遊んだりした記憶はないが、猫のヒゲを剃ったりするなどの悪さをしていたのは覚えていた。花をちぎったりするいたずらを注意しても、なかなか止めようとしないうような頑固さもあつたが、今ではなつかしい思い出だ。

生駒高校の野球部ではピッチャーとして活躍し、後にはじめてゴルフでも才能を発揮したというように運動が得意だった。マージャンの腕も大したものだったらしい。

大倭殖産の社長になってからは、紫陽花邑の中の大倭会館の建て替えや福祉施設の整備など、何くれとなく相談相手になってくれて、とても頼りがいのある存在だった。彼は平城京ロータリークラブ、自分は奈良大宮ロータリークラブと所属のクラブは違っていたものの、奈良県下のロータリークラブの行事には共に参加することが多かった。ゴルフも二カ月に一度は一緒にプレイを楽しみ親交を深めていた。太っ腹で愚痴を言わない、いい男だった。大倭にとっても自分にとっても本当にかけがいのない存在だった。

盛賢の帰幽後、懇願されて彼の後任の大倭殖産

社長に就任して、慣れない建築の業務内容を把握するのに苦労している。

大倭殖産は家族的で家内工業的な温かい雰囲気のある会社だが、これも盛賢前社長の人徳によるものだろう。彼は細かいことはあまり言わず、大きな方向性をしっかりと部下に植えつけてきたようだ。

法主さんが示した神ながらの宗教への信仰心は厚く、自身の運命をしっかりと見つめながら帰幽していったと感じている。霊界から大倭のこれらを見守ってくれているに違いない。

## 大倭精神が生きている

中島 健

彼との思い出の第一は、彼が赤ちゃんの時、背負って子守をしたが、大きな体をしていて背中が体をそりくりだして難儀したことが忘れられない。ヤンチャなことでは、彼の口から聞いたことだが、高校生の時、通学途中で噴水のある所に鯉が泳いでいたので、山葵の丸めたものを放り込むとパクと飲み込み、突然水面に大きく飛び上がったと面白そうにしゃべっていた。

大学に進学した時は、毎月の決まった仕送りしかしてやれなかった時代だった。学生時代の話を聞くと、仕送りは四、五日で消えていたと言っていた。後はマージャン屋のマスターが面倒見てくれたと、後に仕事をするようになってから聞いた事がある。

大倭殖産の営業に関わるようになって柴地社長の裏方を、目立つことなくよく支えてくれていた。

先代柴地社長の突然の逝去で社長に就任することになった。その時一緒に仕事仲間だった設計担当の岡田君が私に、「彼は立派な大将になる」と語っていたことを今でも思い出す。

バブル崩壊後のむづかしい時代に引き受けた指揮官だったが見事に切り抜けた。彼の亡き後、社員全体がそれぞれ自分の持ち場を黙々と支えている姿を見ると、盛賢社長の社員教育が生きていることに、さすが大倭精神が生きていることにうれしく思う。

## 子供の時からのお相棒

吉澤 光夫

「もりかつちゃん」との出会いには昭和三十三年三月に大倭に来た時です。かれこれ五十七八年前になりますが、小さい頃に一緒に遊んだのは三、四年ぐらいい間ですか。

学校に行くときはみんな揃って並んでいきまいた。冬の寒い日は山の中の池に厚い氷が張ってすごく寒かったのを思い出します。夏は二人でよその畑に行つてスイカに穴をあけて麦わらストローで中身を吸つた記憶があります。

学校から帰ると山に薪拾いに行きますが、遊びたい盛りで薪を拾わずに山の中を駆け回っていました。その時にもりかつちゃんが木の上から飛び降り、笹の切り株を踏み抜いて足に刺さってケガをしたことがあります。笹の切れ端が足の中に残って取るのが大変で、急いで法主さんのところへ連れて行きました。中々取れませんでした。あんまり痛がりもせず泣きもせず辛抱して治療をしてもらっていたのを覚えています。

その他色々な事をしてきたと思いますが、余りにも年数がたつたのでこの程度しか思い出すこと

が出来ません。

大人になってからは、よく麻雀をしました。我原さん宅や、我が家での麻雀は夜遅くまでワイワイガヤガヤと楽しく遊んでいました。体格もよく健康には自信がありそうな人が病に負けて、私より先に天国に行くなんて信じられません。ご冥福をお祈り申し上げます。

奈母太加天腹

## 盛賢さんと言え

杉本 順一

私が大学四回生になって大倭一門のメンバーになるのを許された頃でした。盛賢さんは中学生でした。偶然彼と旧拝殿の入り口で出会いました。忘れもしません、突然彼は「ポンちゃん、勉強って面白いかな？」と正面から聞いてきました。私は「うん」と言いながらしばらく考えて、「そうやなあ……、本を読むのはすきやけどなあ」とこたえました。これがはじめて盛かつちゃんと対話した思い出です。

私と同期入門で、大倭殖産の社長だった柴地則之さんが急逝し、盛賢さんが社長になってくれました。毎年お正月には拝殿において大倭事業関係の事始の会があります。その席で話してくれる盛賢さんの挨拶は現実社会を読み、時流に沿った内容の話が中心でした。ああ、盛かつちゃんも、すっかり本が好きになったなあと感じていました。今はありませんが、大倭印刷の工場二階が独身寮でした。独身時代の盛賢さんも結婚するまでそこにいました。私の仕事場は大倭印刷向かいの旧教務所でした。

時々朝から大倭殖産の事務所から電話がありました。かけてくるのは決まって吉澤秀子女史です。「ポンちゃん、お願いします」「よっしゃ」。これ

だけです。すぐに印刷の階段を駆け上がります。私が盛かつちゃんの目覚まし時計でした。

結婚後の彼が定刻前にバスを降りて会社に向かう姿は、立派なサラリーマン社長でした。

もう少し現界で共に邑の「何か」をしたかったね。

## まさかこんなに早くとは

市川 英次

矢追社長が亡くなられてから2カ月余りが過ぎましたが、今でも会社に来ているのではと思うことが時折あります。

私が社長と初めて会ったのは、昭和53年の夏でありました。大倭殖産株式会社に入社した第一日目でした。その時は、とにかくガタイがよく、当時はパンチパーマであり、あの顔でしたのでコワモテなお兄さんがいる、というのが第一印象でした。又、昭和24年生まれと聞き、同い年ではないかとなおさら驚いたことを今でも覚えています。

それからの38年間、社長と共に歩んできましたが、会社発展の為にトップリーダーとして常に前向きな姿勢と計画性、各方面への積極的な行動力を発揮して今の殖産を築き上げてくれました。

仕事大好きな社長でありましたが、他にもゴルフ大好き、夜の新大宮も大好きということも思い出します。特にゴルフの腕前はシングルプレーヤーでありまして、コンペなどでは常に本命であり、その結果も優勝ということが多かったように思い出します。私などは下手の横好きであったので社長と同じ組でプレーすることはあまりなかったんですが羨望の眼差しでいつも見ていました。昨年の7月に入院すると聞いた時は、1カ月くらいでまた元気に会社へ帰ってくると思っていました。

した。その後、入院生活が長引き、社長と直接に話をする機会がなく心配していたんですが、社長が亡くなる1週間ぐらい前に会社に来た時は、当時の山田専務より「社長が来ているから会ったらどうや」と言われ、約1年ぶりに少しだけ話をすることができ、お互い病気の話などしたことをありがたく感じております。

まさかその後こんなに早くとは夢にも思っていなかったので大変なショックと衝撃です。つらく悲しい思いですが、社員一同、一致団結して会社発展の為に頑張り、社長がコミットメントした5カ年計画を達成させることが社長に対しての供養かと思えます。

思い起こせばいろいろなことが頭をよぎります。が今は、「社長、本当にありがとうございました」と申し上げたい気持ちです。

合掌

## 仕事も遊びも

遠藤 俊介

私が大倭殖産に入社したのは昭和54年4月の事でした、もりかつちゃん（こだけこう呼ばせていただきます）は当時29歳、以来37年同じ会社で過ごしました。仕事では部署も違っていて私は現場、彼は本社で営業と、日頃あまり会う機会もなく、最初の頃の接点は大倭の草野球チームでの試合でした。チームのエースであったもりかつちゃん。その大きな体には似合わず軟投派でした。

当時はゴルフもしていません、スポーツはもっぱら野球だったのではないでしょうか。ゴルフは彼がいつごろやり始めたのかは知りませんがコンペなどで一緒にプレーすると、若い頃はミスショットするとツブツブ言ったり負けず嫌いなんだなあと感じたものでした。

▶旧事務所にて  
大倭殖産入社



▲昭和38年10月29日  
中学生の盛賢さん  
(中央)



▶左端 年月日不詳  
大倭エラース(右端)  
昭和54年2月25日



▶昭和40年代後半  
直会演芸会で大喜  
利。左端、右から  
2人目が柴地則之  
さん

あと麻雀が好きで結構卓を囲みました。こちらはなかなか上手で私が負ける事の方が多かったように覚えています。四暗刻の単騎待ちに振り込んだのは人生一度だけ。貴重な体験をさせてもらいましたが今ではその仕返しをする事もできなくなりました。

入社して数年し、私もぼちぼち仕事を覚え、役所のプレハブ工事やビルの新築工事など、営業と工事の立場で共に仕事をするようになりましたが、突然の柴地社長逝去により彼は社長の重責を背負う事になりました。最初は不慣れな社長業にもがいている風にも見え、また営業時代より格段に社員に気を配るようにもなりました。

入社当時はほとんど飲めなかった酒も社長になってからは格段の進歩?で私と同様、蟒蛇と化していきました。晩年は、付き合いのある人とのコミュニケーションをとる場として酒の会も必要だけど飲めない人が多いから、お前が努めてそういう場を務めなさいと、社長室で教えてもらった事を思い出します。

37年も同じ会社で働き、兄貴のような感じでしたので早い旅立ちに寂しさを感じますが、今頃違う世界でも元気にしている事と思います。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

合 掌

### 思い出すチームプレー

相本 忠秀

昭和54年8月、大倭殖産株式会社に入社させていただきました。当時は官庁物件が多く、厚生労働省、奈良県の営業は斎藤氏が担当、奈良市は矢追前社長が担当されていました。

入社後3年目頃に奈良市の富雄南公民館を担当

した時のことです。1階躯体コンクリート打設翌日に奈良市の中間検査が実施されることになっておりました。ところが現場の手違いで一部未済工事が発生したため、夜に先々代の柴地社長に連絡し、明日の中間検査の対応をお願いしました。未済工事を翌日早朝より実施するために検査時間を延ばしてもらう必要がありました。朝一番より矢追前社長が市役所へ赴いて検査官を足止めしてもらい、斎藤氏が現場で待機してもらって時間稼ぎをしてもらうことで未済工事をやり終わり、無事に検査を受けることができました。

先方は何か変だと気付いていましたが、無事に終了することができました。奈良市の物件が初めてだったこともあり、いまでも思い出されます。矢追前社長、30有余年本当にありがとうございました。

### いつも冗談を言ってくれた

土屋由美子

昭和60年に殖産に入社した時、盛賢社長は確か営業部の部長をされていたと思います。第一印象は、「大きな人」、「飄々とした人」という感じでした。新人の時に電話の取り継ぎで失敗した時に冗談を言って受け流して下さったことを覚えていきます。

時間をかけてお話をする機会はありませんでしたが、昔は電車で出かけられるときに学園前まで何度か送り迎えをしたことがあり、その時はご自身の話をいろいろ話してくださいました。ヘビースモーカーだった社長が昨年の春頃に、「部屋の灰皿を処分してくれるか」と言われた時に、かなり体調が悪いなあと感じました。そして昨年の7月1日の全体会議ではだいたいしん

どそうにお話をされてきました。一番後ろに座っていた私は思わず涙がでてしまいました。

それから1年足らずで社長は逝ってしまわれました。入院されてからも何度か会社で顔を出されていましたが、今年になってからは少しお元気がなられたように思えて安心したりもしていました。

最後にお話したのは5月末か6月の初めごろでした。「熱いお茶くれるか」と言われて、私が社長室を出る間際にいつもの様に何か冗談を言われました。

社長も私も誕生日が8月なので、毎年8月が近付くと「お互いまた年取るなあ」とおっしゃっていました。今年から社長のお誕生日は「山の日」という祝日になりました。

社長、長い間お疲れ様でした。ゆっくり休んでいただいて、いつまでも私たちを見守って下さい。

合掌

## 実の兄以上の存在

竹内 靖

私と盛賢社長とは、私が入社した平成元年に社長になられてからのお付き合いです。私が27年間お仕えしてきた社長との思い出は表には出さない優しさを感じたことです。

それは平成15年の12月年末の慌ただしい中、私が脳梗塞で大倭病院に入院した初日、病院が消灯した10時頃だったと思いますが、何かの会合の後忙しい中お見舞いに来て頂き、「あとのことは心配せんとゆっくり休め」と言ってくれ、申し訳ない気持ちから解放され、ほっとした気持ちになったことを思い出します。

また普段、車で一緒に折などに盛賢社長の

子供時代の悪がきだったころの思い出話をされる時は実に楽しそうで、私もそんな話を聞くのが好きで、私も兄がいますが、実の兄以上の温かみを感じた事を覚えています。

矢追社長の、この闘病生活の1年間は、会社にとっては本当にあつという間に過ぎてしまったという感じがします。私も月に2度ほど会社を代表して連絡、状況報告に入院先の県立医大病院に行っていました。亡くなる2週間前の本当に辛そうにされている時にも、今後の予定を小まめにスケジュール表に書き込む作業をされている姿は凛として、最後まで社長業を全うしなければならぬという「凄み」を感じ、改めて敬服しました。

本当に社長お疲れ様でした。最後にこの27年間、会社の良かった時も、苦しかった時も盛賢社長と一緒に仕事をさせて頂き、色々教えて頂いたことは私にとつて人生の宝物だと思えます。

これからの会社の行く末を温かく見守って下さい。

合掌

## 出会いと感謝

山田 潔

矢追社長に初めて出会ったのは、私が富雄の土木建築会社に勤務していた時でした。私が30歳の頃、奈良市の入札で名刺を交換させていただいたのが、最初であったと記憶しています。

その後、私は不動産会社に転職、自社ビルの建設にあたり、どこに施工を依頼するか迷った時、スーと浮かんできたのが、まさしく、社長のお顔でした。立派なビルを建てていただき、バブル期には大いに儲けさせていただきました。

然しながら、何事もいい時期は短く、バブル崩壊後は転職を余儀なくされ、ハローワークに行く

と、偶然にも殖産の求人が目にとまりました。すぐに電話をいれると、「面接にきいよ」と言ってくださり、その場で入社が決まりました。平成5年8月2日、本厄の真只中のことです。

あれから23年。月日の経つのは早く、私も65歳になりました。私にとつて社長は、2歳年上の兄貴というより親分のような風格をもったとても大きな存在でした。他人の力を当てにせず、持ち前の強い精神力で乗り切っていく自信家、負けず嫌いで向上心が旺盛、面倒見がよくいつも为中心的な存在。そんな大きな社長の懐の中で、私は、自由に安心して思うように仕事をさせていただきました。

仕事について、社長から指示や苦言を受けたことは、ほとんどありませんでしたが、逆にそれが私にとつて無言のプレッシャーとなり、今日の私を作り上げていただいたのではないかと、とても感謝しております。

大倭に導かれたような不思議な出会い、ご縁をいただいて大倭で育ててもらった私、これから私なりに少しでも恩返しが出来ればと思っております。

盛賢社長、本当にお疲れ様でした。

合掌

## こぼれずみ

岸野春子

ある年の大倭神宮年末大掃除の場面。山崎波留茂「もうサボってはっかり！ 見てみい、中西（正和・大倭会会長）さんや野（保夫・大倭会会計）さんがあんなに頑張ってはんのに！」

盛賢「あんな人、死なはったらすんがな」春子「そやなあ。ダンちゃん（大倭殖産・柴地社長）が死んだら社長を継いだもんな」

盛賢「そや、抑さえのエースや」

ああ、それなのに……。

# 寸 紗

第121回

中西 聖祥さん



## 目前の一步

「僕すごいおじいちゃん子なんです。長男(2人兄妹)なんで可愛がつてもらって、よくキャッチボールして遊んでもらいました。小学校の時にプラスチックバットを買ってもらって、おじいさんのお尻を思いっきり打ってえらい怒られた記憶がある。たぶん痛かったんやと思います」

祖父とは大倭会前会長中西正和さんである。聖祥さんは、奈良市西木辻町で墨屋を営む株式会社祥碩堂の4代目で昭和60年生れの31歳。現在は営業統括部長をされている。すつきりとした身のこなしで快活に取材に応じてくださった。

聖祥さんは子どもの頃から体を動かす事が大好きで、小学5年から大学1年までサッカーを続けた。春日中学のトップ選手であり、いずれば全国大会に出場してプロになる事を

夢見た。しかし、何人ものJリーガーを輩出する奈良育英高校サッカー部に入学した途端、「1週間もしないうちに叩きのめされました。井の中の蛙だった。こんなレベルの世界があるのか」と。部員約120名。最高レベルのAからFまでのチームに分かれ、天候も休日も関係なく練習し、礼儀作法からコミュニケーションのとり方まで厳しく指導された。

「もうやめようか」。葛藤が続いていた1年生の冬、左膝蓋骨骨折。入院して1週間ほおっとしながら色々考えた時に開き直れたんです。逃げたくなかった。改めて3年間やり続ける覚悟を決めました」

2年目からは環境にも慣れ先輩もでき、サッカーが楽しくなり始めた。Bチーム左サイドハーフ、ミッドフィルダーのポジションを務めた。大阪商業大学経済学部に入学。スタイルの違いから1年間でサッカー

部を辞め、「あとの3年間はどうめちやめちや遊びましたね。今でいう車バカです。体力もあつたので、休日は朝の8時半から夜10時までパナソニックやシャープでバイトして、稼いだ給料の殆どを車に使ってました。大学4年間と社会人1年目まで、車検を受けた事がないくらいのペーసుで買い換えていました」。

父親の康郎さんとは折合いが悪く、家業は絶対に継がないと断言し大阪で建築関係の手回しドライバー等の製造販売会社に就職。「仕事してみても、営業は僕の中では天職やと思いました。基本的に人の好き嫌いつてあんまりないんですよ」

仕事に慣れるまではしんどかったが、夜遅くまで働き、終電まで飲む上司に付き合っても、全く苦にならず楽しかったという。「高校3年間の忍耐力がなければたぶん、お客さんに苦情言われたら反発してみたり、上司に怒られたら文句言ってみたりするんでしょうが、そういうの一切なかったですね。言われた事を聞いて、自分なりに考えてみる事は身になってるのかなと思います」

会社帰り、入院していた祖父正和さんの所へ立ち寄った時、「親子仲良く仲直りして、お父さんの後を継いで言ってくれたんです。亡くなる前でした。やってみようか、その

時初めて思いました。辞表を出すのが、名古屋に欠員が出たというので、一年間だけの約束で転勤。4月に配属され、4月末には事務員の杏菜さんとお付き合いを始め、翌年初めには結婚をとり交わした。とんとん拍子で事が進んだのは不思議だったという。

4年間勤めた会社を円満退社し、祥碩堂へ帰ってきて5年。「祖父達がベースを作り、それを積み上げて改良し、商品の種類を増やして会社を大きくしてきたのが親父。リスクを負ってでも前へ出て行かないといけない時代に親父は出てくれた。小さい頃から親父や母親が頑張ってるのも正直見てましたし、そういうのも全部含めて継いで行くというのが僕の仕事。自分のためではなくて先祖さんのためですね。目の前の事を一歩ずつやっていく事だと思ってます」

聖祥という名は法主様の名と祥碩堂の一字を加えた名前前で、父親の康郎さんがいくつか候補を出し、法主様に選んでいただいたそう。

「大倭の地には祖父父母の念いや人生の一部があると思うんです。中西家としては切っても切れない場所」

今日も愛娘の芽結ちゃん2歳が聖祥さんの帰りを待っている。

(聞き手 李章根)

あじさい日誌

8月12日 お盆休みの時期、昇ちゃんは大変元気で青山法義さんと映画「シン・ゴジラ」へ。  
8月15日 終戦記念日。

午後2時から大倭神宮で立教開宣記念日の祭典が開かれました。高倉敦子さん(熊本県水保市)、永坂まゆり・あづみ姉妹(神奈川県大和市)、2人は東光大祭まで滞在)も参加。

8月16日 この日は矢追盛賢さんの帰幽五十日目でした。

8月17日(旧7月15日) 東光大祭及び祖霊祭が行われました。午前11時30分から東方の碑前

において大祭開始のご挨拶。12時から教長さんらにより奥津斎庭で祖霊祭。その間、拝殿にお

いてはDVDの映像で法主さんの平成4年8月13日東光大祭法話をお聞きしました(『おおやまと』平成21年8月号「宗教の根本——自分個人の心の修養」・9月号「幸せになる近道——霊界人と交流する」として掲載分)。祖霊祭後、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭の祭典。祭典後、経木が皆さんに返されました。

午後4時半から大倭墓地で矢追盛賢さんの納骨式。

8月23日 大倭大本宮月次祭。この日発行の『おおやまと』の元である平成6年8月23日の法話(「大倭の節目の年に——立教開宣五十年」)をお聞きしました。

9月3日 ならパークホテルで午前10時30分から邑交会。

9月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

9月9日 屋久島の手塚賢至・田津子夫妻が来邑、交流の家に1泊されました。

9月10日 午後、交流の家でF IWC定例委員会。「東アジア文化都市2016奈良市」の一環として大阪の劇団「維新派」が平城宮跡で「アマハラ」上演。

9月15日~10月24日、交流の家を宿泊所にする事になり大勢の人が出入りするのでよろしく

お願い致しますとのこと。

大倭安宿苑では(菅原園)

8月25日 そうめん流しとかき

氷で納涼祭を行いました。(須加宮祭)

8月24日 陶芸クラブで湯飲み等を制作しました。(長曾根祭)

8月23日(日)フロアーに提灯を吊り下げ夏祭り。かき氷、射的等のゲームで、景品も沢山持って帰りました。

8月25日(特養)誕生会で5名(内、喜寿1名と米寿2名)の方のお祝いをしました。

8月17日 中庭で外気を感じながら流しそうめん。職員が本物の竹でそうめんを流す台を作りました。

8月18日 誕生会。(八重垣園)

\*月次祭(大倭神宮)

10月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第573回祝会

10月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

10月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮)

10月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第332回大倭会文化行事

秋の旅行のご案内

—瀬戸内海の多島美・歴史を訪ねる—

日にち 平成28年10月30日(日)・31日(月)

行き先 (1日目) 奈良・淡路島・高松  
栗林公園 → 大島青松園・高松泊

(2日目) 直島(瀬戸内国際芸術

祭 ペネッセハウス)・宇野港・

岡山・奈良

宿泊 花樹海 電話:087-861-5580

費用 3万円

申込 10月3日(月)までに、湯浅または溝口ツヤ子へ

問合せ 湯浅芳郎 携帯090-6987-5847

大倭会文化講演会

われわれはどこから来て、どこへ行こうとしているのか?

日時 平成28年11月12日(土) 午後2時~

場所 大倭大本宮拝殿

講師 関野吉晴氏

プロフィール:

探検家・人類学者・外科医であり武蔵野美術大学の教授でもある。

1978年にギアナ高地を訪れ、1981年にペルーのアマゾン川源流地域でアンデス文明の遺跡を発見したりしている。1993年から長い歳月をかけ、人類発祥の地アフリカから人類拡散の足取りを辿る旅、グレートジャーニーを開始している。

《誕生以来700万年、地球上に時空を拡げて偉大な旅(グレートジャーニー)をしてきた人類。だが、このままでは世界は破滅だ! 環境破壊、人口爆発、食料不足、資源の枯渇、そして原発……。われわれがこの地球上で生き残るため、歩き直せる「旅路」はあるのか?》

—関野吉晴対論集『人類滅亡を避ける道』の帯より

この大きな問いについて関野氏は、何を語ってくれるだろうか?

※講演会終了後、懇親会を行います。

あんない

8月18日 誕生会。

\*月次祭(大倭神宮)

10月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第573回祝会

10月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

10月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮)

10月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。